

## はじめに

ロシアは巨大な河川国家であり、世界の大河川上位34のうち6の河川（レナ、エニセイ、オビ、ヴォルガ、オレネク、コルィマ）を領域内に含んでいる。他の地域と同様、河川は生産、交通、交易、情報伝達といった多様な面で文明圏の形成に貢献し、風土や景観の構成要素としての面も含め、文化の基盤となってきた。とりわけロシアの社会文化の発展に大きな意味を持ったのは、ウラル山脈以西のヨーロッパ部の河川である。古くキエフ公国の時代はバルト海から西ドヴィナとドニエプルを伝って黒海・地中海に抜ける水系が大きな意味を持ったが、中世以降モスクワ・ロシアが東方に拡大していくにつれ、圧倒的に大きな意味を持ったのはヴォルガ川だった。

ヴォルガはヨーロッパ最大の河川で、全長3,530km、ヴァルダイ丘陵の森林地帯に発し、森林ステップ、ステップを経て、半砂漠地帯のカスピ海に注ぐ。支流は約200。流域面積は137万平方km。ヨーロッパ・ロシアの3分の1を占め、11の州と4の共和国にわたる。ヴォルガ流域は、都市数（448）、人口（5,700万）、工業生産（国の45%）など、モスクワ・ペテルブルグの二大中心について国家の最も生産的な部分を包含している。

ソ連崩壊後、地域の愛郷意識や帝国へのノスタルジーが高まり、またロシア的空間表象への関心がよみがえるにつれて、ヴォルガという地理・文化空間の特異な性格や機能、およびその表象のあり方の問題が、改めて文化学的な関心の対象になりつつある。

私たちは上記のような問題関心に立って、「ヴォルガ文化圏とその表象をめぐる総合的研究」（日本学術振興会科学研究費（基盤研究A））を組織し、2009年度から2011年度にわたって、3年間の共同プロジェクト研究を遂行した。ヴォルガ流域をひとつの文化圏と捉えた上で、この空間を人文科学の諸方法に沿って総合的に分析することが共通の狙いであった。その際、研究方向を多角的なものとするために「文化生成の場としてのヴォルガ流域」「ヴォルガ・イメージの多義性と機能」「東西文化論にとってのヴォルガ」という3点の研究テーマに沿ってチームを構成し、それぞれ下記のようなコンセプトで研究を進めた。

### 1 文化生成の場としてのヴォルガ流域

バルト水系、北ドヴィナ水系、ヴォルガ=ドン運河を通じてバルト海、白海、黒海に通じるヴォルガは、古来交易のルートであると同時に文化情報の経路だった。また中・下流域は古くはハザールやヴォルガ・ブルガール、13世紀以降はキプチャク・ハン国の支配する土地であり、16世紀のイワン雷帝によるカザン・ハン国、アストラハン・ハン国の征服によりロシアに編入された経緯から、現在でもマリ、チュヴァシ、タタール、カルムイクなど、非スラブ系の住民を多く含み、宗教的にも多様である。本研究はヴォルガ流域を文化の対抗と対話の場と捉え、この地方の地理・民族学的な背景、歴史・社会的な特徴、言語・宗教上の様相を解明、ヴォルガ流域の文化圏としての特質を解明する。研究の過程で、他の河川流域地帯（沿ドニエプルや沿ダニューブなど）との比較の手法も用いる。さらに、この地方を舞台として生成、展開された文化が、ロシア帝国、ソ連、

および現代のロシア文化の成り立ちに果たしてきた役割を解明する。

## 2 ヴォルガ・イメージの多義性と機能

文化史はイメージ構築の歴史であり、ヴォルガも歴史の中で矛盾をはらむ複雑なイメージ層を形成してきた。中世以降の基本イメージとして、ヴォルガ上流は文化的聖域としての北ロシアへの入り口、中・下流域はアジアとの接点・ロシア化されるべき未開への入り口であった。17・18世紀には、ステンカ・ラージンやエメリヤン・プガチョフによる、民衆反乱の舞台としてのヴォルガ・イメージが加わった。一方で民衆のフォークロアから「母なる川」のイメージが生まれ、18世紀の頌詩は悠久なる帝国の川のイメージをはぐくんだ。国民性の追及が文学芸術のテーマとなっていく19世紀後半、ヴォルガは国民のメンタリティを映すロシアの川、最もロシア的な空間としてのイメージを獲得していく。このイメージは20世紀の文芸、とりわけ『ヴォルガ・ヴォルガ』（アレクサンドロフ、1938）などのソ連映画によって増幅された。第二次世界大戦ではスターリングラード（ヴォルゴグラード）におけるナチス・ドイツとの死闘が、国防の最後の砦としての愛国的意味合いを付与した。本研究はこうした多義的なヴォルガ・イメージの背景とその機能を、文化記号論的に整理し、性格づける。

## 3 東西文化論にとってのヴォルガ

ロシアは国家の西方（リトワやポーランド）に向かっては大ロシア、小ロシア、ベラルーシを含めた東スラブ国家としての顔を向け、東方に向かっては、フィン・ウゴルやチュルク系民族を包含した多民族国家としての顔を向けてきた。モスクワ国家の東辺をなす沿ヴォルガ地域はその場合、コーカサスと並ぶ文化的フロントとして、ヨーロッパとアジアをつなぐ多民族帝国ロシアを象徴する場となる。興味深いことにヴォルガ中・下流に住む非ロシア系住民も、この地域を文化接触の前線と意識し、「ヨーロッパとアジアの十字路」といった表象を積極的に使用している。本研究はこのような多民族的ヴォルガの表象が、スラブ主義やユーラシア主義を含め、東西文明の中でのロシア文化の位置づけをめぐる諸論に果たす役割を研究する。

我々の3年間の共同研究は、研究分担者・連携研究者を含めて12名のチーム編成で出発した。研究過程では若手研究者を中心に上記の数を上回る研究協力者にご参加いただき、また他の関連テーマの研究チームとの合同企画をも多数試みた。

地域の共同研究の手法には様々なものがあるが、本研究はそれぞれの参加者が専門としていたフィールドワーク、文献研究、視覚資料研究、現地研究者との連携といった各手法を最大限に生かす形を試みた。また、地域の総合的研究における実体験の不可欠性を重く見て、ヴォルガ流域を3部分に分けたうえで、3年度に渡る3回の旅で、最上流から河口部分までを目で見て感じる集団調査旅行を遂行した。この調査旅行の組織と実現には、スラブ研究センター及び北大大学院文学研究科に所属する若手研究協力者の方々、およびロシア諸地域の関連専門家の方々のひとかたならぬ協力を仰いだ。この方々の献身的な努力がなければ、我々の事業はとても成立しなかつただろう。

諸方面のご協力のおかげで共同研究は順調に進行したが、成果は多岐にわたっており、未だ完了の段階にないものもあって、全体を単独の書物として形にするのは時期尚早である。しかし、ヴォルガを文化空間として捉えたうえで、その歴史的経緯、空間的特徴、イメージの発展史を概観するという意味では、一連の基本的な成果の連なりを得ることができた。本論集はそのようなテーマに沿った論考を収録し、ヴォルガ文化史として読んでいただける形に並べたものである。研究分担者の方々はもとより、本書のために快くご研究の成果を提供して下さった多くの研究協力者の方々、および限られた時間の中で編集を進めていただいた前田しほさんに、深く感謝申し上げます。

本書が関連の専門家諸氏および一般の読者の方々の目に触れ、ご批判をいただくと同時に、ロシア文化史および他領域の文化研究の刺激となるならば、それに勝る喜びはない。

北海道大学スラブ研究センター  
望月 哲男